

## 8年間の成果と現在の課題

**加藤** JICAにとってNGOとの連携の成果の一つは、従来JICAが必ずしも得意でなかった、草の根レベルでのきめ細かい支援ができるようになり、組織としての幅が広がったことです。また、連携を通じてNGOの方々から仕事のやり方や考え方も教わったことも多いです。地方でのネットワークも広がっています。以前はNGOとJICAという緊張関係にあったことも否めませんが、今では対話が成り立つ、成熟した関係になっていると思います。



# NGOとJICA 連携の成果と課題

1998年に対話の場が設けられ、次第に活発化してきたNGOとJICAの連携。どのような成果が生まれ、また今後に向けてどんな課題があるのか。連携にかかわりの深いNGO、JICA代表者が語り合う。

photos by Asada Yuki



JICA国内事業部長

## 加藤 宏

Kato Hiroshi

船戸 私も最大の成果は信頼関係の構築だと思っています。実は先日、ある放送局が国際協力をテーマに生番組を制作するというので、出演の相談を受けたのですが、放送局の内部で「NGOの人が出て大丈夫か」という意見があったそうです。つまり今でもNGOは何を言い出すかわからないといった、不信の目で見られているわけです。しかし、JICAとNGOの関係はそうではなく、このような対談企画が成立するという意味でも、信頼関係ができてきているといえます。また、共通の目標を持ってパートナーシップを組み、双方が得意な分野を尊重し合いなが

ら協働できるようになってきています。**加藤** 自身は職務の中でNGOの方々とお話する機会を得ているいろいろなことを知り、理解を深めることができました。しかしすべての職員がそうとはいえませんが、船戸さんがおっしゃるパートナーシップに向けてまだまだ課題があると思います。ただ、若い世代を中心にNGOにシンパシーを持つ職員も増えていると思うので、時代とともにもっと良くなっていくでしょう。

任が伴うので、NGOも専門性を高めていかなければいけません。NGOだから大目に見てほしいなどといった甘えは許されない。問題があれば厳しく対処していただかないとNGOも成長していきません。加藤 JICAにとってのもう一つの課題は、NGOが多様化している中で、プロフェッショナルなNGOではない、アマチュア的な良さがあるNGOとどう連携していくかということです。

船戸 小さいけれど地道にいい活動をしているNGOはたくさんあります。そうしたNGOとの関係づくりはぜひ考えていただきたい。

**加藤** 実はJICA内部でも議論が分かれ、プロフェッショナルな団体としてかきやって、大きな成果を残すという考え方もあります。JICAも人員に限りがあり、すべてのNGOと連携するのは難しい。そこで、例えばネットワーク型NGOを通じてNGOとの横の関係を拡大していくことができればと思っています。これはNGOの方々と一緒に議論を深めて考えていきたいですね。

船戸 そうしたオープンな姿勢が大切だと思っています。NGOの良さはむしろアマチュアリズムがあるところでしょう。NGOのプロ化、専門化は重要ですが、欧米などではプロ化が進んだ結果、企業的な存在になってしまっているところがあります。そういうものが増えていくことが果たしていいのでしょうか。世界のNGO

の中で大きな問題です。

## 新たな連携の可能性

**加藤** 日本だけでなく世界の中でJICAと日本のNGOの関係を発展させていくことが重要です。ODAの世界では国際的援助コミュニティーの中でしっかりと位置付けられないと、どんないい活動も評価されない、といったことがあります。NGOも恐らく同じではないでしょうが、NGOの国際的なコミュニティーの中、NGOの認知度を高めるためにも、互いが連携して、例えばアジアなどで国際的なNGOのネットワークの構築を進めることもできると思います。

また、NGOとJICAは 市民社会という共通の基盤に支えられているので、それを共に築いていくことが大切です。NGOの財政・人材的な問題の解決のためには、NGOが大学やコンサルタントとも連携を図り、もっと人的ネットワークの流動性を高めていくことが大切だと思っています。そこでJICAの機能や制度をうまく活用していただいて、NGOの世界の活性化にお役に立てないかと考えています。

船戸 確かに国際的なネットワークの強化は日本のNGOの課題です。実は7月のG8サミットにはNGO版もあり、G8のネットワークNGOが集まってサミットにNGOの意見をどう反映させるかを話し合いました。JANICからも2

人の副理事長が参加しました。2008年には日本でサミットが開催されるので、それまでに日本のネットワークのレベルを高めることがJANICのチャレンジです。NGOにとってもODAにとっても一番大切なことは市民の理解と参加です。国際協力の世界の中にあるわれわれは国際協力が当たり前のように思っていますが、世間でどの程度理解されているかは疑問です。景気が悪くなるとすぐにODA削減ということになってしまふ。日本人の精神的な基盤として国際協力が大切だという合意が社会の中にできていないのです。ODAもNGOも市民の理解と参加という目標は同じですから、私たちは協力して理解促進に注力すべきでしょう。



(特活)国際協力NGOセンター(JANIC)理事長

## 船戸 良隆

Funato Yoshitaka

**加藤** 市民の理解を得るためには、やはり一緒にやっていただくのが一番いいと思うのです。経験したことがなければ

部外者として見るので批判的な見方に偏りがちですが、やってみると難しさも分かり共感もできます。特に若い方には途上国に行っているいろいろな経験をした友人をつくったりしてほしいですね。それによって「途上国」が抽象的でなく、固有名詞でとらえられる具体的な対象と

なり、より国際協力への理解が深まると思います。

## 連携の将来像を見据えて

**加藤** 船戸さんは、30年後のNGOと国際協力像をどのようにイメージしていますか？ 私たちは今の活動を続けていて中・長期的にどのような姿を目指すのか、展望を見据えることも大事だと思います。

船戸 一つは、NGOの実力が上がり、さまざまな機関間での人的交流がもっと盛んになっていると思います。そうなるべきだと思います。そういう意味では例えばNGOとJICAの給料がそんなに変わらなくなっているでしょう。もう一つは、国際的なNGOのつながりがさらに緊密になり、一つのまとまりとして意見を発信していくだけでなく、政府とNGOがより建設的な関係を築いていく動きが世界的にあるのではないのでしょうか。

また、NGOの世界でも分極化ということ、大きいNGOはますます大きくなり、小さいところはますます小さくなる、ということも起こると思います。それをどうとらえるか、NGOの中での重要な課題です。

**加藤** 私は比較的大きい規模の事業をJICAと連携してやる団体がもっと増えるとうよと思っています。例えば今、草の根技術協力のパートナー型の団体数は約45ですが、2〜3倍に増えてほしいですね。理想的な連携像の目標を具体的に決めて共に取り組んでいくこともできると思います。

船戸 そのためにはJICAの人的リソースの拡大も不可欠だと思いますが、互いに限られたリソースでそのような将来像に向けてどう取り組んでいくのか、一緒に考えていきたいですね。JICAもNGOも同じ日本の国際協力の担い手なのですから。

一定の実績を有するNGOなどの団体が、これまでの活動を通じて蓄積した経験や技術に基づいて提案する途上国への国際協力活動をJICAが支援する事業。